
死者が転生する為に頑張るようです

なつや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死者が転生する為に頑張るようです

【Nコード】

N2847R

【作者名】

なつや

【あらすじ】

これは一人のダメ男が事故で死んだ後に、来世こそ良い人生にするために、死んだ後に頑張る物語。

これはダメ男は受動的だった自分の殻を打ち破り、自分からキチンと動ける男になるために物語。

果たして彼は閻魔に下された業を成し遂げ、来世も人間になれるのか！？失敗すればランダム転生で運が悪ければ単細胞生物！成功すればイケメンでラッキーマンな超人への転生？！

※咄嗟の思いつき系不定期更新です。一話一話を短くしてあります。

細かい設定なんてありません。

Ep01..業と言うけど実は課題って感じ

働き始めて4年と半年ほど。死の宣告が俺にも遣ってきた。

「悪いけど、会社の再編でウチの部署からもうしても一人、派遣さん切らなきゃいけないんだ。ごめんねえ」

「いえ……覚悟はしてました。多分、自分が一番可能性ありそうだなあって……」

人の良さそうな初老の男性……課長が、俺に申し訳なさそうに言う。

俺は派遣もとの会社から既に宣告を受けていたし、そもそも他の派遣さん達と自分を見比べた場合の重要度の差を理解していたので、非常に残念に思う気持ちがあるものの、諦めてその宣告を受け入れた。

俺の経歴は良くあるモノのひとつで、商業高校の情報科を卒業後、そっち系の短大に入り、そして教師に勧められた会社の面接を受けて、そのまま会社入りした。

学力はそれほど高くも無く、プログラミングが少しは出来るかな？程度。資格試験は役立つモノは特に無く、強いて言うなら中学の時に英検3級取ったなあとか、マニュアルの車の免許を持ってる位だ。会社入りしてからは、初年度でウツっぱくなくなったりしたが、それでも頑張って仕事を続けた。

勤務態度はそこそこに真面目……大きな失敗は無く、時々ボンミスやらかすぐらいで可もなく不可もなく、他の人の手伝いであっちゃんたりこっちゃんたりと言う感じで立ち回っていた。

他の人が専門的に業務をやっている中で、だ。

（コウモリみたいなんだよなあ……評価はされてたけど、切られやすい位置だったわけだよ、本当に）

派遣先の人にそれなりに惜しまれながらも、お別れ会と言う名の宴会をして貰った。

どうやら、俺は派遣先では手の掛かる息子、或いは弟的な立場だったらしい。

自覚させられると微妙だが、みんなが良い人だったので悪い気はしなかった。

その後、入社以来、景気の悪化と共に傾き続けた会社が、リーマンショックで更に傾き、打ち出したその場凌ぎの対策で新しい案件には入れるまでは自宅待機、その後一ヶ月ダメだったら「会社都合」で解雇という政策のお陰でおれは見事にプー太郎になった。

「はあ……どうしたもんかなあ」

世間はクリスマスで浮かれる中、どうしても憂鬱な気持ちになる。と、いうのも他でもない。自身のやりたい事、目標が見つからないのだ。

昔はゲーム会社に入ってゲーム作りたいなー、なんて夢を持っていたが、現実を直視するにあたり自身の能力の低さから今の能力ではダメだと思わされた。

働き始めて、夢は所詮夢になって、そして夢や目標が何時の間にか無くなってしまった。

そうなってくると、理由もないのだが学生時代に恋愛の一つもしようとしなかった自分が何故か恨めしくなる。

（恋愛のフラグ自体はどっかに散乱してた筈なんだよなあ……女子と話す機会、それなりに多かったし）

自分が恋愛に鈍磨だと言う自覚はあったが、いざ振り返ると惜しい事ばかりしてきたものだった。

いっそ、人生のやり直しが出来れば等と思いたくなる。

ゲームと違って、やり直せないのが人生ではあるが。

「さて、何時までもウツってても仕方ない。早く仕事探さないとな」

目標も夢も実力ないが、現実是非情だ。

仕事も金もない奴が、この日本で生きると言うのなら残された道はホームレスか親の脛かじりのニートだ。

現在の俺はニート……ではなくフリーターだ。

親父の伝手でバイトを紹介して貰い、そこで配達のバイトをしつつ就職活動中だ。

既は無職の期間が3ヶ月になるのが精神的にかなりキツイ。

もっとも、流される様な人生ばかりの俺だったが故に、能動的に自分で考えて動くというのがかなりの労力であり、苦悩であるのは言うまでも無かった。

「どっかに良い話ないかなあ」

そんな風に思いながら横断歩道を渡っていると、突然景色がぶっ飛んだ。

わけもわからないまま、体の右側に力が入らなくなり、頭が路面にぶつかり嫌な音が頭と首にした。

とりあえず、俺が最期に思ったのは横断歩道の信号は青で、どーしてこうなった、と言う事と、四半世紀も生きてきて、結局親孝行全然出来てねーなあという事と、色々相談に乗って貰った親友達に申

し訳ないなあという事だけだった。
弟の事は特に思い出さなかった。

次に気が付くと、俺はどんぶらこ、どんぶらこ水面を渡る小船の上にいた。

釣り人っぽい人がオールを使って小船を操っているようだ。

「おや、起きたのかボーズ」

「え？あ……おはようございます」

「ああ、おはよう。だがもう少し寝てて良いぞ。向こう岸まではまだ時間がかかる」

釣り人はそう言ってオールを漕ぎ続ける。

「向こう岸？」

「ああ、その面はわかってないな？お前さんは死んだよ。大型トラックに轢かれて頭蓋骨陥没で脳挫傷の上に首の骨が折れて即死だ。そして今、三途の川を渡っていると言うわけだ。現世からあの世に向かってな」

「……ああ、やっぱ俺死んだのか」

「アレで奇跡的に生きてたとしても、植物状態確定か全身麻痺だな」
「……はあ」

釣り人、もとい三途の渡し守の言葉に思わず涙目でため息をついてしまう。

それから暫く、三途の渡し守が雑談してくれた。

テンションがだだ下がりだった俺はそれのお陰で僅かではあるが氣力を持ち直し、開き直って雑談に興じることが出来た。

なんでも、ここ数年は精神的に病んでる奴やDQNな死者が多かつ

たり、或いは自分のように不慮の死を遂げる奴が多いらしい。

ぶっちゃければDQNが加害者のケースが多く、後者の不慮の死はそれの被害者か、本当に運が悪かった人のようだ。

ちなみに、俺は運が悪かった人の方のようだ。

うーん、悪運だけは強いと思ってたんだけどなあ……って、事故死してるなら運は悪い方か。

そんな感じで話していると、渡し守が色々教えてくれた。

どうやら三途の川を渡りきると即座に閻魔様の前に連れて行かれ、そこで判決が下されるらしい。

判決と言うのは生来ていた頃の行動から、俺に下すべき『罰』を与えるらしい。

「罰、かあ……」

「何、余り重く考えるな。要はお前が直すべき所を閻魔様が指摘して、ソレを直す為の業を下されるのさ」

「え、そうなの？」

「そうなんだ。んで、ある程度の成果を出せれば輪廻転生を行い、また何かに生まれ変わるってわけだ」

「なるほど」

「ちなみに与えられた業に失敗しても輪廻転生は出来るけど、転生の時の種族がランダムになる。ミジンコとかアメーバのケースもあるし、ミトコンドリアってのもあったな」

「……せめて哺乳類が良いな、マジで」

そうこう話していると、何時の間に川を渡りきり、閻魔様の前へ。

閻魔さまはバリバリのキャリアアウーマン風の凛々しい女性だった。

「私がお前の住んでいた地域担当閻魔だ。うん？あまり驚かないんだな？まあ良い。さて、お前の経歴は確認させて貰った。……細かい話は長くなるから省略する。ぶっちゃければお前は25年の人生において受身の姿勢ばかりが目立つな、そんな事ではどんな生き物になったとしても長くは生きられまい。よって、お前に下す業は『主体的に動くようになる事』だ。細かい事は案内の鬼に聞け。次に会うのは業が終わった時だ。では、お前が業をモノにできる事を期待する」

閻魔様は一方的にそう言って退室を促した。
すげえ、口を開いたらそのまま最後まで突っ走ったよ。

その後、案内の鬼：というか角の生えた普通の人っぽいお兄さんに案内されて小会議室へ。

「さて、閻魔様から貴方が履行すべき業に関しては聞かされたと思いますが、ここでは細かい事を説明させて貰います」

そう言って鬼は説明を始める。

先ず、業はあくまで目標であり、取り合えず失敗しても構わない。
ただし、失敗すれば来世において転生する際に何に転生するかがラ
ンダムになってしまう。

成功した場合は来世において好きな種族に転生できる上、多少のボ
ーナスが付く、と言うこと。

ボーナスの例は、人よりも運が良くなる、病気に掛かり辛くなる、
頭が良くなる、運動が出来るようになる、美人になる、等だ。

次に説明されたのは業を達成するために行くべき場所だ。

行く場所は完全な異世界で、元の世界とは別の世界であり、元の正
解を上位においた下位の世界への転生だと言うことだ。

ただ、下位の世界は言ってみれば人々の妄想で作られた世界であり、

空想の場所なので、空想そのままの能力を用いることが出来るとう。

勿論、そんな異世界に着の身着のまま送って即座に死なれても意味がないので、目標を達成するか、完全に諦めてしまいうまで不老不死になる、と言うことだった。

そこでの行いもまた閻魔様によって評価される事になるらしい。

「まあ、あなたの場合は『自らが為すべき事を見つけ、それを達成する事』が重要ですね。後は、向こうで何をなしたかが評価ポイントとなります。異世界に行く際には不老不死に加え、一人一つの特殊能力も与えられます」

「特殊能力？何かできるようになるんですか??？」

「人によって違うのであれですが、まーマンガやゲームの特殊能力みたいなモノだと思いきださい」

「へー…まあ、つまらない能力じゃない事を祈りたいな」

「では、そろそろ時間です。後ろのドアをくぐれば異世界です。それでは、貴方が異世界で業を達成できる事を祈ります」

「ありがとう」

そうして俺は異世界への扉をくぐった。

E p 0 2 : 遣るべき事を決めてみようって感じ

俺が異世界への扉をくぐり、扉を抜けた先は一言で表すのならば。

「大平原って感じだな」

そう、大平原だ。

自分の腰の辺りまである草の海が360度、地平の果てまで広がる、そんな場所だった。
扉の方を振り返る。

「ああーっと！申し訳ない！大事な事を伝え忘れてました！色々と確認の画面を出す方法は『表示』^{ディスプレイ}と言ったり念じれば出ますので！後、色々と能力説明などもあるので参照しておいてください！では！！」

案内の鬼のお兄さんは閉まりかかった扉を開けて、それだけ言うのと改めて扉が閉まった。

扉が閉まると一瞬だけ扉はその姿を残していたが、直ぐに蜃気楼の様にゆらりと揺れて、遂に何もなかったかのように消えてしまった。

本当に周囲が草の海だけになってしまうと、何をしたら良いか判らなくなる。

取り合えず、自分に何が出来るか知るべきだろうか？

特殊能力をくれるといったし、異世界だから治安とか言葉とかわかったもんじゃないし、架空の世界だと言うのならそれこそゲームみたいにモンスターも居るかもしれないのだから。

「えーっと『表示』^{ディスプレイ}だっけ？」

恐る恐る、といった様子でつい口にしてしまう。
すると、目の前にSFとかで見るとような立体映像の画面が現れた。
その見た目は具体的に言うと、ゲームのメニュー画面っぽい感じだ。
何せアイテムやステータス、特殊技能に装備、オプションにヘルプ、
その他諸々といったものが立体画面に表示されているのだ。
ゲーム好きにしてSF好きの俺としては厨二病が再発してしまうほどに興奮しそうだ。

そして、取り合えず先ずは特殊能力を見ることにした。

特殊能力の所に指を遣ると『ピッ』という音が鳴り、次いで画面が特殊技能の画面に切り替わる。

画面に表示された特殊技能の名前は漢字に文字で書かれていた。

クリエーション
『創造』

見た瞬間、思考が止まった。

止まった思考が考えた事は一つだけ。これ、神様級の力じゃないか？ということだけだった。

再起動して『創造』に指を遣ると今度は説明の画面が出てきた。

『無から有を生み出す能力。望めば金銀財宝であろうが食べ物だろうが機械だろうが何でも想像し念じるだけで』クリエーション『創造』する事ができる万能の力。ただし、どこかの漫画みたいに魔法弾を飛ばしたり、気功波を飛ばしたりするのは専門外。あくまで何かを創造する事しかできない。』クリエーション『創造』は被造物の規模によってMPを消費する』

「詰まる所、MPがあるだけ何でも創造つくれる力ってわけか」

それ、なんてチートとか言いたくなった。

だがぶっちゃけて言おう、俺がこんなチカラ持っても、猫に小判で豚に真珠というものだ。

これが自分がよく見てたラノベとかだと、とにかく凄い事を考え付いて色々と出来るのかも知れない、けど、生憎こちとら夢や希望といったモンを、見失っている最中に死んだ無気力な現代人一歩手前ぐらいの男だ。

そして自分で言うのもなんだが欲が薄い方だ。

強いて言うならそこその生活とゲームがあればそれで良い、とか思っちゃもう人間なんだ。

だから、この能力はオーバースペックにもほどがある。

食い物や飲み物に困らない、とかその程度で十分だったんだけどなあとも思う。

取り合えず、考え事もそこに打ち切って、改めて別の画面を開く。

ちなみに、前の画面には画面右上にクローズボックスがあったので、それを押せば一発だった。

次に行ったのは地理を調べることだ。

ディスプレイ

ディスプレイ

この『表示』には周囲の地図も『表示』される様なのだが、残念な事に俺自身が知覚、認識した事がある場所以外表示されないようだった。

ディスプレイ

ただし、『表示』で出した地図の画面には俺が向いている向きと方向が矢印等で表示されているので、上手く扱えば色々と便利だ。

そう言えば、昔遊んだゲームで地図の表示率が100%になるとアイテムがゲットできるつてのがあったなあ……。

それにあやかって、世界地図でも作ってみようかな？

そんでもって、地図が出来たら俺自身に何かご褒美を作り出そう。そうと決まれば早速あちこち歩いてみよう。

ただ歩くんじゃ大変だから、それ向きの装備も作るべきだよな。そう思って自分の装備を早速『創造』^{クリエイション}を使って作ることにした。

「ここは高校時代にワンゲル部だった人間としてはやっぱり山男的装備だよな」

頭の中に思い浮かべるのは典型的な山男的な衣装、白無地の帽子に厚手のズボンにシャツとウィンドブレーカー、靴は足首までキチンと覆うタイプ。

そして忘れちゃいけないのが登山グッズの入ったリュックサックとテントとストックだろう。

「水と食料はいつでも出せるけど、一応ある程度リュックに入れておこうかな?」

あくまで気分の問題なのだが、そういうところは凝り性な為ついつい態々用意してしまう。

食料は缶で、水は水筒を用意して其処に入れた。

便利さとかそう言うのは気にしたら負けなのだ、全ては気分とか浪漫が優先されるのだ。

「……なんだろう、少しワクワクしてきたな。一人だけなのに学生時代みたいな万能感って言うか……そっか、久し振り過ぎて忘れてた。これが『ヤル気』があるって感覚だったかな」

声に出すと強く自覚できた。

心が弾み、好奇心があふれ出す。

こんなのは思い返すに高校生の時が最後だった気がする。

「強いて言うなら友達が居ないのが寂しい所か……。まあ、こればかりは、なあ」

俺の我儘の為に友人たちに「死んでくれる？」なんて言うの嫌だし、そもそも言うことも出来ないし……。別世界だから。

……『クリエイション創造』で作れそうな気もしたし、実際作れるみたいだが俺の現在の次第MPが10として、あと10の24乗程のMPが必要になるらしい。

……10の24乗って単位あったよな？ 確かペタだっけ？？？

だめだ、思い出せない。

EP03..意外な所で困った

さて、マップ製作を始めてアレから3日が経過する。

山あり谷あり森もあり……かと思ったが、悲しいかな3日歩いても未だに大草原といった風情だ。

正直に言おう、飽きた。

勿論、丘陵程度の起伏はあったし、ぼちぼちと木も生えていたりはあるが、そんなのは何の慰みにもならない。

そもその問題として。

「なんで動物はおろか、虫一匹にも遭遇しないんだ？」

と言うことである。

死んだ時に身に着けていた物をそのままっていたお陰で、お気に入りの曲を適当に流す事が出来るのだけど、生体反応0という現実を流す事は難しい。

そもそも、この世界植物だけ？

なんて偏った世界だ、ツマンネエ……。

「いっそアレだよな、空とか飛んでみれば状況も変わるか？」

というか、周辺の情報収集するにも移動するにも飛べた方が楽だわと、なると空を飛べるモノが必要になる。

ぱっと思いつかぶのはヘリや飛行機なのだが、残念な事に操縦方法などろくに知らない。

次点で『空を自在に飛べるようになる道具』を『創造』する事なの

クリエイション

だが、これって出来るのだろうか？

と、思っていたら気付いたら手の中には子供の頃にアニメで見た頭につける竹とんぼもどきが……！

「幾ら空を飛びたいからって、コレはないわ。空想科学的にはコレで飛ばうとすると頭蓋骨陥没だぞ」

ネタ過ぎるので却下。

しかし、飛べそうな気もしたので勿体無い。

ここでピコンと脳裏に電球に光が灯る図が浮かぶ。

発想の逆転、何故飛べそうな気がした？

答えは、俺が竹とんぼもどきで飛べるって思ったから。

試しに、少し離れたところにソレをおいて、やや長い棒を『創造』クリエイションして、ソレの電源スイッチと思われる場所を押すと、ブウウウウウウン！という轟音と砂煙を上げてそれは天の彼方に飛翔していった。

ちなみに、ソレを置いていた地面は挟れていた。
使わなくて良かった、とマジで思った。

ちなみに、竹とんぼもどきは適当な所で『創造』クリエイションの派生である『消去』イレースを用いて消しておいた。

『消去』イレースは単純な話が『創造』クリエイションによる被造物を消すだけの能力だ。
コレは棒の役目が済んだ時に「邪魔だなー」と呟いていたら消す事が出来たから知ることが出来た能力だ。

まあ、そういう訳で……結構無理やりな解釈だが、俺が白と言えば黒でも白に出来てしまうような感じなので、適当に指輪を『創造』クリエイション

してその指輪には『指輪を嵌めた人間が思った通りに空を飛ぶことが出来る』という概念を植えつけてみる。

方法としては、そうなる様になれーと念じながら指輪を作るだけだったりする。

適当過ぎる？仕方ないじゃない、チートだもの。

そして結論、空を飛べるようになる指輪、飛翔指輪の作成はすんなりといった。

成果も勿論望んだ通りだ。

地表から大体5メートルの所を時速60キロほどで飛んでいる。

少々風で体が冷えるが、以前友人のバイクに二人乗りした際は100キロ出されてビビりと寒さでガクブルだった事を思えばぬるい方だった。

そして昼過ぎから夕方までの時間をかけて調査した結果判った事だが、当然ながらこの世界にも森や山、それと湖が存在した。

今更過ぎることだが、呼吸が出来るので一応は地球と似たような環境なのだろうと思う。

相変わらず動物や虫などの生物反応0だけど。

「……動物無しの世界って、マジで不自然と言うか違和感しかでねえ……」

こうなってくると魚が居るのが気になってくる。

「肉がない、魚がない、そんな世界で何を楽しみに生きろと言うんだろうか！というか、そもそも俺、料理作るの苦手じゃねーか！！」

料理そのものは作れなくはない、しかし苦手で不得手なのだ。

そして俺は作りたてほやほやの手料理が好きだ。

母さんが作ってくれたオムライスとか肉じゃがとかが大好物なのだ！

そして其処で思い出す。

もう二度と、母さんの手料理を食べる事ができない、と言う現実を。更に言えば、親父のカレーとか鉄板料理も食えない！

「鬱だ……」

友人に会えないのもネットゲやネットが出来ないのも諦めた。
だが、好物が食えなくなったと言う現実だけは彼を大いに凹ませた。

EP03..意外な所で困った(後書き)

色々気づくのが遅いつて？
それは仕様です。

EP04：一人の夜は？

そろそろ1日が終わろうとしている。

夕日が地平線の向こうに沈みかけ、逢魔ヶ時ともいえる夕暮れ時だ。

「さて、キャンプセットでも使おうかな？」

クリエイションで豪華に建造物とかも作れるだろうが、今日の俺のMPは残念な事にそろそろカラッポだ。

『表示』ディスプレイで確認したので間違いない。

ちなみに、MP1消費で簡単な道具……長い棒や竹とんぼもどき、リュックや食料、キャンプセットなどが作成可能だった。

どのレベルまでMP1消費で済むのかわからない。

何せ、家一軒（例：埼玉在住の超幼稚園児の家）を建てようとした際、消費MP300とか出たのだから。

「まあ、テントは嫌いじゃないし、飽きるまではコレですごくかな？」

高校時代の部活の杵柄と言うべきか、割とすんなりとテントを設置し終わり、次いでコンロセットを準備し、食事を作り始める。

「始めのうちに食料と水、それに調理器具とか『創造』クリエイションしておいてよかったな」

食料自体はレトルトの茹でるだけの物とスープのみだが、それでも十分に腹は膨れた。

レトルトはバランスが悪い、とよく言われるが俺としてはその当たりはどうでもいい。

取り合えず、美味けりやおーけいなのだ。

「『表示』^{ディスプレイ}の機能、追加とか出来ないかな？」

主に、地図の達成率とか……。

目標を設定したのは良いけど、目に見えてどのぐらい、というのが無いとモチベーションが、なあ。

まあ、そこはガンバリマシヨウって所か。

「それに、一人で過ごすのは流石にちよつと……寂しいな」

良い歳をしてあれだが、俺は割りと寂しがりなのだ。

一人でもある程度は良いが、やっぱり仲間が居なけりゃつまらない。

「せめて、話し相手が欲しいなあ」

切実、と言うわけでもないが、いつか精神的にやばい気がするなあ……。

どっかで某未来の青狸型ロボットもどきを作るのもアリかな？

でも、青狸も良いけどもっと可愛いのもアリだよな、妖精っぽいのか。

悩ましい。

適当に食事が済んだ所で、片付けをしてお茶を飲みながら夜空を見上げる。

「ほわあ……凄いな、故郷じゃ見れないほど星がいっぱいだ」

思わず感嘆してしまうほどに美しい綺麗な星の海。

何んとも言い難い感動が胸を打つ。

「この光景、みんなにも見せたかったなあ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2847r/>

死者が転生する為に頑張るようです

2011年3月7日19時45分発行